

丸山林平の初期綴り方教授論の思想  
—『新主張』と『生活表現と綴方指導』を中心に—

高 森 邦 明

はじめに—丸山林平について

丸山林平（一八九一～一九七四）は、新潟県に生まれ、高田師範学校、東京高等師範学校を卒業して、大正九年四月より昭和四年、新設された東京文科大学国文学科に進学するまで、東京高等師範学校附属小学校訓導として国語部主任を務めた。また、昭和七年から昭和十四年まで東京高等師範学校講師として国語科教育法を講じた。昭和十四年満州建国大学教授、戦後は静岡英和女子短大教授を歴任したが、国語教育に特に関係することは少なかった。丸山の国語教育関係の業績の内、綴り方教育に関係するものには、次の著書がある。

『綴り方教授の実際的新主張』 <sup>(1)</sup> （田中豊太郎と共著）	大正一〇年四月	大日本学術会
『生活表現と綴方指導』	大正一三年三月	目黒書店
『国語教育と児童文学』	大正一四年六月	南光社
『スターチ綴方の心理学』（高橋喜藤治と共訳著）	昭和三年六月	郁文館
『国語教育学』	昭和七年一月	厚生閣
『綴り方教育論』（国語科学講座）	昭和九年四月	明治書院
『綴り方教授学』	昭和一三月二月	成美堂

その他に論稿として、

- 「綴り方教育学序論—精神分析的考察」（『現代綴り方教育大観』東京南光社昭三・三 所収）  
 「小学校に於ける国語教育全」（『師範大学講座国語教育5 国語教育の實際上』建文館昭一  
 ・一 所収）

さらに、『教育研究』誌を中心に発表した十数編の論稿がある。ただし、綴り方教育についてのみでなく、広く感情教育、芸術教育等の問題に関連させて扱ったものも、これに含める。

丸山については、これまでに、『生活表現と綴り方指導』が、大正前期の随意選題か課題かの論争の後を受けて『小学綴り方教授細目』に結実した指導系統案による方法と、生活表現主義への方向を示したものとして、また『国語教育と児童文学』が、国語教育における児童文学の位置、あるいは読書指導の位置を探ったものとして、さらに『国語教育学』が、国語教育の諸領域の構造を教育学的に考察したものとして、いずれも国語教育史において、独自の価値が認められている。

しかし、丸山の綴り方教育について特に取りあげて考察したものは、きわめて少ない。そのなかで、光村図書『近代国語教育論大系13』（昭五一）では、『国語教育学』の綴り方教育に関する部分を収めて、倉沢栄吉氏が「解題・解説」を付している。また、滑川道夫著『日本作文綴り方教

育史2大正篇』（昭五三）では、第八章「生活表現の綴り方教育」において、「生活表現の定着」の一節を設けて『生活表現と綴り方指導』を「解題」しているほか、その後の丸山の業績についても詳細に触れられている。ここでも、これらにおける言及の上に考察をすすめていくことになる<sup>(2)</sup>。

なお、丸山に関する参考文献としては、生前に彼が語った言葉が収められている、倉沢・滑川他編『近代国語教育のあゆみ1—遺産と継承—』（新光閣書店一九六八）所収「国語教育学の提唱—丸山林平の人と業績—」がある。

本稿は、丸山の初期の著作『綴り方教授の実際的新主張』と『生活表現と綴り方指導』を中心として、彼が綴り方の実践を始めた時期において、綴り方指導についてどのような考え方を持っていたか、特に「生活表現」ということについてどう考えていたかを明らかにすることを目的とする。具体的には、

- ・丸山は『国語教育学』の著作に見られるように理論派として聞こえているが、綴り方教育については、その出発点においてどのような思想を基本的に持っていたか。
- ・彼は、「生活表現の綴り方」を主導したといわれているが、その「生活表現」とはどのような意味のものであるか。これには、生活綴り方や生活指導などにおける「生活」の概念、あるいは一般の「表現法」という場合の「表現」の意味に影響された理解があり、その意味は必ずしも明確ではない。

この他に、彼は第二十回全国訓導協議会において「綴り方指導の根本方針」について報告を行ったが、これについての解説として指導系統案の意義を強調した。ここでは、これについては単にふれるにとどめて、その考察は別に行うこととする。

## 1 『綴り方教授の実際的新主張』について

### 1-1 執筆部分について

『綴り方教授の実際的新主張』（大正十年四月十日発行、以下『新指導』<sup>(3)</sup>）は、丸山林平と田中豊太郎との共著である。構成は、大きく二つに別れていて、第一編「綴り方教授の実際的新主張」と、第二編「綴り方教授の実際的指導」となっている。しかし、執筆部分についての署名はない。これについては、共著者田中豊太郎による証言がある。田中は、「共著された『綴り方教授の実際的新主張』では、どの場面をお書きになられたか。」の問いに対して、「綴り方教育論のはじめのほうは、話しあいをして書いたから、だれが書いたというわけではない。終わりの方の実際の指導は、私が書いた。初めの文体論とか、文章論とかは、丸山君が書いた。<sup>(4)</sup>」と答えている。

本書の第一編には、後述するように大正十年四月までに丸山が書いた『教育研究』掲載の論文が加筆されて、あるいはその内容を取りこんで書かれたものが収録されている。また、第一編と第二編との文体の相違からしても<sup>(5)</sup>、第一編全体が一人の執筆と考えられる。従って、その執筆に当たっては共著者間に話しあいが行なわれたとしても、第一編の内容には、本書の成立までに丸

山によって書かれた論説と共通の彼らしい独自の思想が現れており、それは、その後の著書にも、一貫して流れているものと見ることができる。

本書『新主張』は、滑川道夫氏の前掲『日本作文綴方教育史2』によれば「芦田の主張のバリエーションとも見られる趣きをもってはいたが、芦田ほどの内観性は持っていない」（四三一ペ）あるいは（『生活表現と綴方指導』が「はるかに創意にみちている」のに比べて）「共著のためかオリジナリティが不足している」（四三六ペ）といわれている。

しかし、以上のことから本書について「共著のため」あるいは「芦田の主張のバリエーション」と見ることに、充分慎重でなくてはならないだろう。（なお滑川氏は再版本によっている。）

#### 1-2 『教育研究』に発表した論稿

丸山は、本書の発行までに『教育研究』に次のような論稿を発表している。

1 「全国教員組合設立の急務」	大正九年七月
2 「全国教員組合組織の方法」	同 八月
3 「くりから谷と弓流し」	同 九月
4 「順応主義を駆逐せよ」	同 十月
5 「一切衝動悉皆満足とは何ぞや」	同 十一月
6 「人間味教育と綴方教育」	同 十年一月
7 「自己表現と綴方教授の使命」	同 二月
8 「スタイル研究と綴方教育」	同 四月

このように、大正九年四月に東京高等師範学校訓導となった直後から、ほとんど毎月のように『教育研究』に執筆を続けている。しかもその始まりは、全国教員組合の設立というような当時の社会問題を取りあげての論説である。また、同年夏休みに東京高等師範学校講堂で行なわれた八大教育思想の講演の内の一つである千葉命吉の「一切衝動悉皆満足論」を取りあげての批評も行っている。これらはすべて若々しい批評精神に満ちたものである。（これは、同年九月の末に同校訓導となった後、大正十年十月になって初めて「綴り方研究の出発」という題で綴り方研究を始めるに当たっての覚悟を披瀝している田中豊太郎の態度とは著しく違っている。）

以上の論文のうち、「4・5・6」の論文に見られる思想は、『新主張』の第一章から三章までの内容に取りいれられ、また一部はその材料ともなっている。ここには「人間味の教育」「人間の人間として生長する」「人間的生活をなしうる人」等の共通したキーワードの使用が見られる。さらに「7」の論文は第四章「自己表現と綴り方」へ、「8」の論文は第七章「文体論（其の一）」へ、と取りいれている。

#### 1-3 『新主張』における基本的思想記述の部分

丸山の執筆部分「綴り方教授の実際的新主張」は、全十二章からなっている。このうち、以下において取り上げる綴り方教授に関する基本的な思想が記述されている部分は、前半五章である。すなわち、第一章 綴り方の本質、第二章 自己生長と綴り方、第三章 道徳と綴り方、第四章 自己表現と綴り方、第五章 自己表現の方法。

## 2 『新主張』の思想—自己生張・人間味・自己表現—

### 2-1 綴り方の本質と目的—精神生活と自己生長の重視

丸山は、第一章「綴り方の本質」の冒頭を、「綴り方の本質が自己であり自己の精神生活であることは、わたくしの今更ここに事新しく主張するまでもないことのように見えるが、実際の場合、わたくしたちはよく此の事実を忘れて了ふ。」という文で書きだしている。そして、この「此の事実を忘れて了ふ」ことの事例として、彼は「其の本質を培うことを忘れて表現の指導にのみ行かんとする」事実を指摘し、これは「綴り方の亡国を招」くものであり、このような「表現にのみ注意を向くるは、実用主義・間に合せ主義から来てゐる。うまく世渡りをさせようとしてゐるのだ。」(三ペ)とする。

表現の指導の重視、実用主義というのは、当時の随意選題か課題主義かの対立観から見れば、いうまでもなく課題主義に属し、これに対して綴り方の本質を「自己であり自己の精神生活である」とするのは、随意選題の立場である。従って、先に滑川氏のように「芦田の主張のバリエーション」とされても、やむをえないかもしれない。しかし、彼は、単純に随意選題を支持しているわけではない。同時に彼は、課題につながる「系統案の容認」(第十一章)を行っていることに注目しなければならない。

以上の「自己・精神生活」に関連して、第二章「自己生長と綴り方」で述べている「綴り方の目的乃至作業」としての自己生長ということに注目しなくてはならない。彼は、次のように述べている。

人間社会を美しくいきいきせしめ、発展せしめ進化せしむる大原則は、人間各自の個性をどこまでも伸ばすことにあると思ふ。換言すれば人間各自の自己をどこまでも生長せしむることにあると思ふ。

またしても、綴り方教授の目的ないし作業は矢張り、此の自己生長にあるといふより他はない。何故なら綴り方教授の目的は、「人」を作ることにあるのだから。(一三～四ペ)

さらに「綴り方教授が自己生長の作業であると見る以上、児童の日常生活は悉く綴り方教授の行はるべき場所である。児童の環境凡ては綴り方の教師である。」(一六ペ)とも述べている。そして、児童が環境から何ものかを受取れるように教師の指導が加わらなくてはならない、というのである。

以上において、丸山の綴り方教授の基本的な思想として、綴り方教授の本質は児童の自己と自己の精神生活を培うこと、つまりは自己を生長せしめることである、という考え方を把握することができよう。表現の指導は、第一のことではないというわけである。これは、いうまでもなく『生活表現と綴り方指導』における「表現主義」「生活内容の指導」「生活第一表現第二」という考え方の底流をなしている。

### 2-2 人間味の教育の主張

綴り方の本質を「自己であり自己の精神生活である」という丸山は、これを説明して、「真面目になる創造生活、感激苦悶努力の生活的理想の生活、人間的人間の生活」、一言でいえば「自己の生命全円」のこととして、これが「未だ発表せざるまゝの綴り方である」という（一〇ペ）。次にまた、丸山は、この「人間各自の自己をどこまでも生長せしむること」が綴り方教授の目的である、「なぜなら綴り方教授の目的は、「人」を作ることにあるのだから」とする（十四ペ）。さらに、人生全円の生活を捕えて「人間的生活又は人間味の生活といふ」として、「綴り方教育は此の人間味即ち全人格を養成する教育である」と述べている（二四ペ）。このような「生活」を、そこに「生活の内省による自己の覚醒」が考えられていないというだけで、「単なる日常的生活」あるいは「精神生活」といってしまうことは、おそらく彼の真意に反するだろう。というのは、「人間的」「人間味」という時、自己の覚醒というように自己に集中しない広さと豊かさが志向されていて、芸術的な理想主義の思想を見ることが出来るからである。また、『生活表現と綴り方指導』では、「生活内容の指導」「生活態度の指導」を強調するが、その「生活」も、当然「日常的生活」「精神生活」といってしまうことは出来ない。

「人間味の教育」ということは、当時丸山が多くの論説で主張していることである。特に『教育研究』大正十年一月号には、「人間味の教育と綴り方教育」というやや漫談的な文章を寄せて、文中で次のように述べている。

我々は児童をしてシミジミと人間味を味ふ人間になる様に導きたいと思ふ。潤ひのある、ゆつたりとした大きな人間になる様に仕向けたいと思ふ。（中略）

而して此の教育は、勿論全体として凡ての学科に互つて絶えず注意せらるべきである。けれども、最も此の教育を徹底せしむる所は、言ふまでもなく国語教育でなければならぬ。何故なら、人間味の養成は其の根底を文芸の上に置かなければ絶対に不可能なことであるからである。（中略）

而して私は、人間味の教育を、国語教育の中特に綴りに重きを置きたい。綴りは児童の文芸的作品——語を換へて言へば、児童の生命の表はれであるからである。（一九ペ）

さらに、彼は「綴りは生活内容を深くし潤ひのあるものゆつたりしたものたらしむることが其の仕事の大部分でなくてはなるまいと思ふ。随意選題とか課題とかの論争もさることながら——私は思ひ切つて、それ等はてんで問題にならぬと云ひたい。」（二〇ペ）ともいうのである。このように人間味の教育の主張の立場から、「てんで問題にならぬ」とする彼の考え方を、随意選題に関連づけて見ることは、彼にとっては不本意なことではなならない。

なお、彼が「人間味の教育」ということを始めて発表している論説は、『教育研究』大正九年十月号掲載の「先づ国語教育より順応主義を駆逐せよ」においてである。この中で「一口に云へば今後の国語教育は此の人間味に徹する人間を作ることにあるのだ、潤ひのある、人間味の豊富な人間を作ることにあるのだ」と述べた後で、「今後の国語教育の実際に当つて第一の出発点は、従来の順応主義随伴主義実用主義間に合せ主義の態度を綺麗に振り捨てることである。ドン底に墮したる形式主義から浮き上ることである。」（三一ペ）と、人間味の教育は実用主義、形式主

義、表現指導本位主義的な教育の否定でもあることを明らかにしている。

彼におけるこのような「人間味の教育」という考え方は、創造性を重視した芸術的理想主義が反映したものとして、「生活」をとすれば「身辺雑事的日常生活」のように見る考え方や、それが経済的な現実生活を含まない狭いものとする考え方と対比されるはずである。<sup>(6)</sup>

### 2-3 自己表現の強調

以上の実用主義、形式主義の綴り方教育への否定は、その対称にある自己表現の強調に結びつく。第四章「自己表現と綴り方」に、次のような記述が見られる。すなわち、今日でも昔の「此の日天気晴朗にして一瓢を携へて」式と同様なことをやっているとして、

読本と綴り方とを交渉させようとして、候文の注文状を書かせるのがそれだ、中等学校の入学試験通過を目当てとして、模範文(?)の暗誦のやうなことをさせるのがそれだ。それ等は真に形式主義であり実用主義であり間に合せ主義である。そこに何の自己表現があらうぞ。創造の態度、創作の欲求は全く顧みられないのだ。児童が自己表現の真剣さ尊さを味ふ所にもみ綴り方の使命が存する。自己表現の歓喜に躍り上る所にもみ綴り方の尊さが存在するのだ。(三七ペ)

この後、彼は、綴り方教授として「自己の思想を文字を以て表すことを授くるもののみだ」と解するならば、それは「所謂欧米のグラマチカルなコムポデションでよいではないか」(三七ペ)とする。そのような「言語と文字との単なる形式教育」でないところの「自己を最もよく表現せんとする」綴り方は、内容が大切である。内面生活が豊かで深いということが必要だ、と言うのである。その生活内容を豊かに深く充実させることは、同時に語彙を豊富にさせることになり、またこれが自己表現の方法というようにも位置付けられる(四六ペ)。

以上、丸山の『新主張』に見られる思想を、「綴り方の本質・目的としての精神生活と自己生長の重視」「人間味の教育の主張」「自己表現の強調」の三つの枠組みのもとに捕えて見た。これが、次の『生活表現と綴方指導』においてはどのように発展しているのであろうか。次にその考察に移る。

## 3 『生活表現と綴方指導』の思想－表現主義派の立場－

### 3-1 『生活表現と綴方指導』について

『生活表現と綴方指導』(大正十三年三月一日<sup>(7)</sup>発行)は、丸山の国語教育に関する著作のうち、綴り方教授領域の代表作として取りあげられる例は多い。その多くは、生活主義の綴り方教授を主導したものとしての指摘である。中には、「生活主義綴り方」というのではなくて、「表現のための生活指導」論という言い方で取扱う例も見られる。<sup>(8)</sup>

丸山がこの『綴方指導』を世に問うた前後の東京高師付属小学校関係には、

- ・大正十年九月 芦田恵之助の退職
- ・大正十二年五月十五日 『小学綴方教授細目』の出版

- ・同月十九日から二十三日まで第二十回全国訓導協議会（綴方協議会）開催。その報告は『教育研究』大正十二年十一月臨時増刊 「綴方研究号」
- ・大正十三年における国語部員の相次ぐ綴り方指導書の著述等の出来事が見られる。

国語部員の綴り方指導書としては、丸山のこの書に続いて、

- ・千葉春雄『児童生活に即したる綴方と其鑑賞』（十三年五月目黒書店）
- ・田中豊太郎『生活創造綴方の教育』（同年九月目黒書店）
- ・飯田恒作『綴り方の内面的研究』（同年九月天地書房）

等が、これである。同校国語部の綴り方研究の黄金時代を象徴するものと言うことができる。これらは、芦田の退職と交替する形で部員たちが共同研究をした『小学綴方教授細目』の編集が契機をなしていた。この編集後、綴方協議会後に、最も早く出版された丸山の『生活表現と綴方指導』にも、これらに関連して自分の考え方を明らかにするという目的があった。その序言には、綴方協議会における「綴方指導の根本方針」についての報告が意を尽くさず、ために機会を得て詳細に発表するという会員への約を果すということが一つの動機であると述べている。

なお、その折の「綴方指導の根本方針」は、次のような十箇条であった。

- 一 綴り方は自己の生活を文にあらはし、自己を生長せしめる事を目的とする。
- 二 常に経験を通して自己を視つめる態度を養ふ。
- 三 材は主として実際生活から取らせる。
- 四 発表の態度は外面生活より漸次内面生活に向はせる。
- 五 文体は凡て口語体とする。
- 六 自由選題・課題いずれをも合せ取る。
- 七 児童の発達程度に応じて指導する。
- 八 形式の指導は内容に即して行ふ。
- 九 韻文を作ることは児童の随意とする。
- 十 内容・形式とも多方面に導くを本体とする。但し、多少一方に偏する事があつても止むを得ない。

この序言は大正十二年八月三十一日に書かれている。綴方協議会の報告の出版（大正十二年十一月二十五日）よりも先に書かれたものである。

以上の十箇条に対応する『生活表現と綴方指導』の記述は、次のようになっている。ここでは、本書全十章のうち、その基本的思想と、指導方法としての「生活内容の指導」に関わる部分のみについて見ておく。

- 一 綴り方の目的 = 第一章 綴ることの意義と力、第二章 綴り方の目的観
- 二 自己を視める態度 = 第三章 生活内容の指導
- 三 材は実際生活から取る = 第三章 生活内容の指導
- 四 発表の態度 = 第四章 表現態度の指導

五 文体＝第七章 文体に関する問題と指導

六 自由選題・課題＝第五章 自由選題と課題及指導系統案

七 児童の発達＝第五章 自由選題と課題及指導系統案

これらのうち、協議会においては丸山とは別に「自己を視める態度」について馬淵冷佑、「発表の態度」について田中豊太郎、「児童の発達」（指導事項）について飯田恒作らが発表している。

なお、『生活表現と綴方指導』には、それまでに彼が『教育研究』に掲載した次の論文の内容が収められている。

ア「綴方に於ける組織的指導について」（大正十一年九月）

イ「依然として続く綴り方思潮の渦巻」（同十二年四月）

ウ「綴方教授細目の制定について」（同十二年五月）

エ「綴方指導の根本方針について」（同十二年十一月綴方研究号）

このうち特に、ア、イは『生活表現と綴方指導』に書かれた基本的事項の概要を内容としている。

### 3-2 表現主義派の立場—芸術的表現と内容の充実

先に、『新主張』の思想として捕えた「綴方の本質・目的としての精神生活と自己生長の重視」「人間味の教育の主張」「自己表現の強調」という三つの特色は、『生活表現と綴方指導』ではどのように発展しているであろうか。本書では、これらのそれぞれを他との比較において、あるいは分かりやすいように取捨して、さらに深く論じているということができる。

『新主張』では、綴り方の本質は「自己の精神生活である」とし、その目的は「自己を生長せしめることである」としていた。これに対して『生活表現と綴方指導』では、「綴ることの意義」は、生活の創造的表現、芸術的表現にあるとし、また、その目的は生活を高めること、価値ある生活に導くことにあるとしている。

綴り方の本質を「自己の精神生活」としたことは、「綴り方において最も大切なことは自己の精神生活である」という意味に解しても、観念的で分かりにくい。丸山もこれを十分に説明しているとはいえない。これに対して「綴ることの意義」の説明では、これを「表現作用の一種」として、綴るという表現作用は、「書く、記す、記録する叙述する等の表現作用」とは違うことを指摘し、これには「必ず自己の思想感情生活が表現されなければならない。こゝにおいてか、綴るといふことは、狭義にいふ所の表現（Presentation）と一致して来る。」とする（八～九べ）。新聞記事のような叙述（Description）ではない、というのである。

次のような記述がある。

綴り方に於て、児童は自己の生活、自己の思想感情を文によつて表現しなくてはならぬ。そこにのみ綴り方の意義が存する。而して此の意味で、綴ることは実に所謂創造作用の一種である。

綴ることが単なる事実をデスクライブすることではなくて、自己の思想感情をプレゼント



することである以上、それは創造作用の一種であると共に芸術作用の一種であらねばならぬ。  
(一〇ペ)<sup>(9)</sup>

「生活表現」の「表現」も、このような「芸術的表現」の意味であることに注目しなくてはならない。「表現」についての、このような意味付けは、次の「綴り方の目的観」における「表現主義」の意味も限定する。

次に、「綴り方の目的観」では、丸山は「自然的表現派」「表現主義派」「折衷派又は中正派」等の三種の目的観を示して、自分の考え方を表現主義派に位置付けている。まず彼による三派の説明を一べつしておく。

・「自然的表現派」とは、綴り方教育は「表現のみの教育である」(二二ペ)という考え方で、表現内容(生活)の指導に立ち入らない、「単にあらはし方の技術だけを指導する」(二九ペ)とする。丸山は、この説は生活内容の指導を「嗤つてゐる」ものとして反対する。

・「表現主義派」については、「価値なき自己内容の表現、それが何にならうか」として、まず児童の生活内容を深くし広くすることこそ綴り方の根本作業であつて、その深き広き自己を価値あるやうに表現せしめることが綴り方の目的であらねばならぬ。(二四ペ)とする。また、「綴り方の内容となるべきものは、作者なる児童の真剣なる生活であり経験であり思想であり感情であらねばならぬ。この生活態度は、綴り方教育に於てのみ基礎づけ得べきものなのである」(二六ペ)とする。この表現主義派の説には、丸山は「全然左袒する」と述べている(二八ペ)。

・「折衷派又は中正派」については、「綴り方の目的は、表現を通して児童の自己生長を促すところにある」とする。生活の指導を考えない自然表現派には反対するが、表現よりも生活の指導を重視する表現主義派にも反対で、「表現を通して」児童の生活を指導するというのである。この説には、丸山は、

「表現を通して内容の指導をする他に手の出しやうがないものだ。」などと決め込んでかかることは、いさゝか独断ではなからうか。(三〇ペ)

と、批判している。

以上の三説のうち、丸山は表現主義派の説に立っている。ただし、それは、「あらはし方の技術」の指導、あるいは「表現を通して」の生活指導は、不必要といっているわけではない。「あらはし方」というまでもなく、「表現を通して」についても、「成績処理」に関連してその必要を指摘している(二七七ペ)。

彼の表現主義派の立場は、それが、付属小学校国語研究部員が協議して決定したところの綴り方の目的、「一、綴り方は自己の生活を文にあらはし、自己を生長せしめる事を目的とする。」に合致しているということでもあった。

丸山が自己及び付属小学校の綴り方の論拠とするという「表現主義」という語は、一般的には、彼が用いる芸術主義、内容主義の意味ではなく、むしろ彼が反対する「自然的表現」(単にあらはし方の技術だけを指導する)の意味を持つものと考えられるが、ここでは、彼の用法に従って

おく。

この「表現主義」の考え方の背景には、二つの要素を指摘することができよう。その一つは、先に彼が主張した「人間味の教育」の思想であり、他の一つは、『生活表現と綴方指導』でもその言葉を引き、さらに論説をそのまま付録として掲げている菊池寛の言説である。菊池寛は、大正十二年五月二十二日、第二十回全国訓導協議会において「文芸と生活」と題して講演している。その講演依頼には、国語部主任として丸山が当たったことが、その講演の冒頭で触れられている。

第一の「人間味の教育」については、先述のように「全人格を養成する教育」「人を作ること」をねらい、「根底を文芸の上に」置いていた。綴り方は、児童の生命が表れた文芸作品とした。この考え方は、綴り方を児童の人生科として、生活内容を高めることが第一であるとする「表現主義」の思想と共通している。むしろ同一のものということができよう。本書では、特に「人間味の教育」ということは説かれぬが、別の形に生かされていることが分かる。

第二の菊池寛の言説との関係については、丸山の次のような記述に端的に示されている。すなわち、

わたくしが嘗つて菊池寛氏を訪問して、談たまたま芸術に及び児童の綴り方に及んだ時、氏は以上の如きわたくしの持論に賛せられて曰く、「僕は二十七八まで文章を書いたことはなかつた。文章を書く練習のみが文章を上達せしめるものだと思ふことは大間違いだ、頭を作るのが根本ではないか。児童の綴り方だつて同じことだと思ふ。」と、わたくしは少くとも一人だけはわたくしの賛成者を得てゐるわけである。(一六ペ)

と、菊池寛が丸山の「綴る力を高めるためには綴るべき内容・生活を高めることが、其の根本でなければならない」という主張に賛成したことを明らかにしている。同じことは、菊池寛の講演の中でも、「綴方を人生科と云ふのは、余り大袈裟と思ひますが、私は綴方と云ふものを、もう少し大きくして、人生科としての文芸と云ふ説なら、私の持論でありますので、其の方の意見に賛成を表すのであります。」(『教育研究』二六五号八ペ)と述べている。綴り方を児童文芸と見て「人生科としての綴り方」を主張することと、同じ次元にあるということが出来る。丸山は、先に『教育研究』二四五号(大正十一年九月)に発表した「綴方に於ける組織的指導について」でも、菊池寛の『新潮』二一五号(大正十一年七月)に寄せた「文芸作品の内容的価値」の文を引いて「わたくしは独断ではない。」<sup>(10)</sup>「従来わたくしが綴方について持つてゐた考えと余程似てゐるのである。」(二〇ペ)としている。菊池寛の説に自説の裏付けを得た感じを持ったといえよう。この後、丸山は「頭を作るのが根本」ということを、しばしば用いる。これは、次の第三章「生活内容の指導」の冒頭に述べている言葉「綴り方は教育の大事、生活第一、表現第二。」を、菊池寛の論文の末尾の「文芸は経国の大事……生活第一、芸術第二。」をもじって自己のキーワードとして用いていることとも共通している。(「表現」を「あらはしかた」と読ませていることに注意したい。)

## 4 生活内容の指導—生活的価値の充実—

### 4-1 「生活内容の指導」の意味

『生活表現と綴方指導』において最も注目されてきたところは、「生活表現の綴り方」すなわち「生活主義の綴り方」を主導したといわれる考え方を記述しているところである。これは、先の「表現主義派」の立場から必然的にその方法として派生するものであり、また、より本質的には自己生長・人間味の教育などの思想から産まれるものでもある。以下、これについて考察していく。

『生活表現と綴方指導』第三章「生活内容の指導」では、丸山は「生活内容の指導」の意義と範囲について多くの作文例を引用して、説明している。その基本は、児童の綴り方に生活的内容を充実させ、これを価値あらしめることの重要性を指摘することである。丸山にとって、児童が書くことがないから、「題がない」とか「題を見つけるまで」という題で書くのは、生活内容が貧弱なせいということになる。次のような例は、彼が誰を想定して言っているかが想像できるところである。

児童の中には「先生、どうしても題がないんです。」といふものがある。すると、教師はすかさず「其の題がないといふことが題になりはしないかね。」といったやうな禅宗のお坊さんみたいな暗示を投げかける。小気の利いた児童が早速一かど悟つたやうな顔をして、「題を考へるまで」とか何となく其の場を片づけて行く、湖塗して行く、お茶を濁して行く。こゝに至つては、随意選題の弊も極まれりといふべきである。(三九～四〇ペ 傍線は引用者)

丸山は、「生活内容の指導」の意味を次のように述べている。

綴り方に於ける生活内容の指導とは、児童の人生全円の生活、児童の自己生活のあらゆる内容に人間らしさを見出させつゝ生長せしめて行くことを意味するものである。児童の叡智生活、感情生活、道徳生活、経済生活、趣味生活、享樂生活体としての生活を内省し、又は総合し統一し、又は飛躍して生を突進して行かせる態度について暗示なり注意なり参考なりは、やがて、彼等児童の生活内容の指導となるのである。(四六ペ)

ここに述べられている「人生全円の生活」といい「人間らしさを見出させる」といい、先に『新主張』において「人間味の教育」について用いられていた言葉であった。「人生全円の生活に人間らしさを見出させる」、つまり具体的には「あらゆる生活を内省し、総合し統一し、飛躍して生を突進して行かせる態度について暗示や注意や参考等を与えること」、これが、彼のいう「生活内容の指導」ということになる。さらに具体的には、「部分的・断明的な児童の生活の一個々々についてそれを全部指導するといふことではない」、「綴る以前に於ける生活内容の指導として、綴る内容を深めるとか豊かにするとかいふ」(四八ペ)ことである、とする。以下、彼が「生活内容指導の範囲」として整理している指導の方法を取上げる。

### 4-2 生活内容の指導の方法

丸山は「生活内容の指導」の方法について、「その範囲乃至種類」として「吾人のなし得る範囲は、環境の整理又は刺激と学習乃至訓練の外に出ることは不可能である」と述べ、「Environment と指導」と「Training と指導」とに二分して、これを説明している。

まず、前者では、家庭生活、学校生活について「省察観照の態度を植ゑつけること」（五九ペ）、すなわち生活の態度を養うこと、特に、学年とともに社会との生活的交渉が拡大していくことに対しての態度の指導の重要性を、生活内容の広さに関わるものとして多くの例文を引いて指摘している。例えば、彼が一例文に係りして述べている次のような文は、のち生活綴方が田舎の子供の綴り方から提起されたことと比べて、注目される問題を含んでいるだろう。

都会に住む子供が、常に斯うした社会的事情のために神経をとがらせてゐる事実に対して、家庭も教師も相当に顧慮しなくてはならない。（七〇ペ）

取り上げられている綴り方は、同じ女兒の「アヤシキ女」、「きつとあの人は」（不良少年を題材にしたもの）で、一・二学年で書いたものである。低学年で、社会との交渉がどれくらい行われているかを示す例として、上げられている。児童も教師も、「社会との交渉」という面に、綴り方を通して目を向けさせられていたということであり、「生活の態度」の指導が、都会地なりに求められた時代に来ていたとも考えられる。

この指導は、綴る前の暗示や参考等の、いわば題材誘導的なものであるが、次の「Training と指導」（八〇ペ）では、「最も直接的に児童が綴り方の内容として取入れるべき方面」として、「読むことの生活、聞くことの生活」を指摘している。いわば題材を教師が与えようとする指導である。具体的には、お話会でお話を聞かせる機会を多く作ること、課外読物を多く提供してやることなどが考えられている。

ここで、丸山は、児童文学研究会を設立して研究を進めていると述べて、続けて、学級文庫に備えておいてよい読物のリストを掲げている。同僚に児童文学に通じた馬淵冷佑、童謡に関心を持つ千葉春雄などがいたことや、翌年丸山自身が『国語教育と児童文学』を著作するという事情が、考え合わされる。

ところで、彼は、以上のような「児童の生活内容をゆたかにする」ということだけでは大して価値はなくて、より大切なことは「生活の中に自己を見出すこと」すなわち「自己を見つめること」、それによって「自己を深めること」だとしている。これは、「綴り方指導の根本方針」の中の「二、常に経験を通して自己を視つめる態度を養ふ。」、「三、材は主として実際生活から取らせる。」の意義でもあるとしている。（九二ペ）

ここで述べられている生活内容を豊かにする「生活指導」は、むしろ、問題のある生活を善導したり、進路を指示したりするような生活指導でない。たとえ、「飛躍して生を突進して行かせる態度」を養うとしても、そこに後の生活綴方におけるような一定の方向性を持った生活認識を養う、というような意味がないことは明らかである。

#### 4-3 友納の批判

このような「生活内容の指導」について、友納友次郎は『綴り方教育の将来』（明治図書昭三）

の中で、生活と表現とを二元的に考えているとして批判した。<sup>(1)</sup>「生活価値と表現価値とが二元的に  
対立するものであるかどうか、そこらに大きな問題が残されてゐるやうな気がする」（同書一  
一）というものであった。しかし、これは丸山の真意を理解していないといつてよいだろう。丸  
山は「生活的価値」と表現の「内容的価値」とは同じものと見て、対立的には見ていない。また、  
丸山の「表現第二」の「表現」は上述のように「あらはしかた」の意味で、「綴方」の意味では  
ない。綴り方の本質を自己であり自己の精神生活と見、生活そのものを「綴り方」と見た丸山に  
生活と綴り方とを二元とするような考え方はありえないことであった。これらを広く人間教育の  
見地で捕えていたといわなくてはならない。

以上、大正十年代初頭における丸山の初期の綴り方教授に関する思想を、その著書『綴方教授  
の実際的新主張』と『生活表現と綴方指導』を中心にして見て来た。これをまとめるならば、次  
のようになるだろう。

1 最初の著書『綴方教授の実際的新主張』には、『生活表現と綴方指導』に結実する基本的な  
考え方が表明されている。精神生活と自己生長の重視、人間味の教育の主張、自己表現の強調等  
がこれである。

2 以上の思想、特に「人を作る」ということを重視した考え方や文芸的な考え方を受入れて、  
自己の生活思想感情の表現を創造作用、芸術的表現とする表現主義の思想を支持し、技術だけの  
指導、表現による指導に反対した。

3 丸山の主導になる「生活表現の綴り方」の「生活」と「表現」は、単なる日常生活ではな  
く、人生全円の人間的な生活であり、その単なる叙述でなく、芸術的な表現を意味している。

## 注

(1) これらの著書のうち、『綴方教授の実際的新主張』は昭和六年日東書院より改訂再版された。  
『近代国語教育の歩み1』（新光閣書店昭四一）所収の丸山の「略歴と著作目録」（十二ペ）、  
及びこれにもとづく光村版『近代国語教育論大系13』（昭五一）の解説（五一二ペ倉沢栄吉氏に  
よる）にはこの再版本がリストに上げられている（出版社が「日本書院」となっている）。同様に  
『スターチ綴方の心理学』の再版本（芝書店昭九）が『綴方心理学』として別個の著書の形で上  
げられている。『綴方心理学』とするのは、滑川道夫氏著『日本作文綴方教育史3』（国土社昭  
五八）にも見られる（四五〇ペ「略伝」）。

(2) 丸山の綴り方教育にふれている他の文献と扱い方を掲げる。

・川口半平著『作文教育変遷史』（昭和三十三年十月）、「生活表現の綴り方」の見出しで、その一  
つとして丸山の『生活表現と綴り方指導』を取りあげている。

・飛田多喜雄著『国語教育方法論史』（昭和四〇年三月明治図書）「生活主義に立つ指導法」の  
見出しで、「大正末年の綴り方教育の動向を知るには、丸山林平著『生活表現と綴り方指導』が便利  
である」として、同書の内容の一部を紹介している。（一四一～三ペ）

・前田真証稿「大正後期における綴り方教授細目の考察」（『福岡教育大学紀要』第三四号昭和五九年）、丸山の『生活表現と綴方指導』の内容が比較の対象となっている。

(3) 倉沢栄吉・滑川道夫他『近代国語教育のあゆみ—遺産と継承—Ⅰ』（新光閣昭和四三年十一月）所収「国語教育学の提唱—丸山林平のひと業績—」によれば、丸山は『国語教育学』を除く他の国語教育関係の著書を「主なる著書」とはせず、また『綴方教授の実際的新主張』『綴方心理学』等の共著は「文献目録から抹殺したいといわれた」とある（一三ペ）。丸山の後年の心情がうかがわれるところである。

(4) 同前書所収「綴り方教育の開拓的努力—田中豊太郎のひと業績—」一一九ペ。質問者は滑川道夫氏。

(5) 文体の違いとしては、例えば、第二編では「……と云ふこと」「……と云ふ。」に「云ふ」を用いているのに対して、第一編では「……といふこと」「……と云ふ。」と区別して用いている。また、第一編では「わたくし」で統一しているのに対して、第二編では「私」と「わたくし」を混用している。例えば、「随意選題が当然の帰結であるから、私もそれに賛成であり主張もする」（一四一ペ）とし、次ページでは「無から有を要求する様な残酷な仕事をして児童を苦しめているのではないかと思はれることがある。わたくしにもその経験があり……」している。また、第一編では「何も綴り方教育などゝとわいわい騒ぐ必要はさらにはないではないか。」「うそ字が多かるうが、文がまづかるうが、何とかかんとか用は足るのだ。」（三ペ）という自在な表現法が多く見られるが、第二編には見られない。なおこれらの自在な表現法は、丸山の当時の評論にも共通している。

(6) 滑川道夫氏は、田中豊太郎著『生活創造 綴方の教育』（大正十三年）について「素朴ではあったが表現の母胎としての生活性に着目し強調していることに注意されなければならない。」とした後、次のように述べている。「といっても、田中たちのいう「生活」はせいぜい子どもの日常生活であって、数年後に東北地帯から発生した「現実的な生活性」とは相違している。つまり、田上新吉流のデルタイの生命哲学からくる「生活性」に田中の「生活表現」が脈絡を引くが、生活綴方のそれは、厳しい東北地帯の现实生活から産まれて来るのである。」（注3書八九ペ傍線引用者）この「田中たち」の中には丸山も含められる。

(7) 『生活表現と綴方指導』の発行日は、「大正十三年三月一日」と記されているが、同時に「印刷」が、同年「三月二十五日」となっている。ここでは、印刷日の誤植としておく。しかし、新年度に合わせて出版されることが多いとすれば、発行日の誤植ということも考えられる。

(8) 中内敏夫稿「作文教育の歴史3 大正から昭和へ」（明治書院『作文講座第一巻』昭和四十三年一月）には、「大正の選題論争は、もう一つの遺産を、昭和の作文教育史に残した。大正末にかけて、師範付属の国語科訓導層に形成された「表現のための生活指導」論ともいべき特長ある作文教育法である。」として、田上新吉、峰地光重らの五書を掲げ、その中に『生活表現と綴方指導』も入れて、「これら一連の著作は、今日、国語科作文の領域に限らずひろく用いられている生活指導ということばをはじめて用い、その概念の原型を作りひろめたという意味でも忘

れることのできない重要著作である。」とある。(一三五ペ)

(9) このような『生活表現と綴方指導』における「綴ることの意義」について、丸山は後年『国語教育学』(昭七厚生閣)では次のように述べている。「私は、今から約十年程前に、『生活表現と綴方指導』を世に問うたが、その時は、綴ることの意義をやゝ限定して考へた。今こゝに、明瞭に、その誤りを訂正して置く。(中略)文章即芸術でないやうに、綴方即芸術ではない。芸術に於てこそ、二元論は成立せず、内容即表現であり、表現即内容でもあらうが、しかし、綴方に於ては、或程度まで、二元的考察が許されねばならぬ。少なくとも、綴方教育の見地からは、むしろ二元的考察が必要である。即ち、「綴方=生活+表現」であり、「綴方的価値=生活的価値+表現的価値」の見地に立つことが、よし如何に芸術論と一致しないにせよ、もともと芸術とひとしき概念でない綴方にとつては、より正しい見地でなければならぬ。」(三四七~八ペ)

(10) 『生活表現と綴方指導』には、付録として菊池寛の「文芸作品の内容的価値」(『新潮』二一五号)の他に、これに反論した里見「菊池寛氏の文芸作品の内容的価値を駁す」(『改造』第四卷第八号)、その再反論の菊池寛「再論文芸作品の内容的価値」(『新潮』第二一七号)を収めている。菊池の論文は大正十一年七月号、十月号に掲載された。この時期、菊池と里見は論争を繰り返している。

(11) 滑川道夫著『日本作文綴方教育史3 昭和篇1』(昭五三)では、「友納の批判的見解」の節において「一元論的立場」の見出しで、友納の『将来の綴方教育』を取上げ、彼が丸山の『生活表現と綴方指導』に触れていることについて、次のように述べられる。「内容と形式は、マンジュウの餡と皮のようなものではなく、(中略)といった内容形式一元論的立場(形象理論的立場)がまず強調される。これに対して、丸山林平は「綴り方は教育の大事、生活第一、表現第二」を唱え「生活内容の指導」に力点を設定する。友納はこれを生活と表現とを二元的に考えているものと観る。友納は生活表現一元論、生活指導論こそが、「新生面」を拓くものだとして評価している。」(二〇〇ペ)、一方、氏自身は別のところで「丸山のいう「生活」は、題材という意味に使っている。題材的価値=生活的価値と見て「表現のための生活指導」論が形成される。」とされる。(五十一ペ)